

今回、東京帝國大學教授高木八尺氏が小野塚先生獎勵資金による特別講義を基として公にされた「米國東洋政策の史的考察」は、アメリカの所謂「現代」の探究に出發されてゐる。即ち、Walt Whitman として「Open Policy」を振鬪し東洋に進軍したアメリカを

即ち十九世紀末から大東亞戰爭勃發に至る迄のアメリカの東洋政策を、史的に考察されてゐるのである。著者は人も知る斯界の權威。吾々は「米國政治史序説」其の他「國家學會雜誌」に於て夙に氏の學風に接し、多大の示唆を得て敬服してゐる者であるが、此の度、吾人の關心とする「現代の合衆國の性格に關し長年研鑽の一端を發表されたことは洵に喜び深いものがあるのである。氏の述べられるところ、吾々がシーグフリードに見るが如き線の鋭さ、華々しさはないが、地味にして正確なる叙述は自らまた大家の風を感じしめる。但、淺學不才の吾々をして強ひて之に批判を加へしめるならば、氏は矢張り政治學者であると云ふ既定の事實である、従つて、歴史家として此の書物に接するならば、些かの物足らなさを感ぜざるをえない、と云ふことである。問題は専ら題名にある如く政策の歴史である。如何なる必然が如何なる偶然と相寄り相反しつゝ、歴史的世界を形成して行くかと云ふことに關しては些か不十分な點があると思惟せられる。門戶解放政策が何が故に取られねばならなかつたか。支那に於ける事態の紛糾は勿論のこと、アメリカ國內の情勢、マッキンント、ヘイ等の歴史的個人の問題、が如何に歴史に働いてゐるか、(而も此のことこそ歴史家がアメリカの東洋政策を論ずる場合に第一に注目しなければなら

ぬことである)等に就いては餘り明確な論を得てゐない。然しながら、之は難するが無理である。氏の主眼は飽く迄アメリカの東洋政策の史的考察であるからである。

吾々は徒らに喋々とするを止めねばならない。これだけの總かの紙數で(百十二頁)、これだけの多くの内容を盛り、それに依つて一應アメリカの東洋政策の今日迄の動きを、所謂「現代の合衆國」の一貌を、指示してくれたことに對し、吾々は深甚の感謝を捧げねばなるまい。

今日、アメリカの研究は學問的たると外的たるとを問はず、須臾も之を忽にするを許されぬ重要事である。そして、此の太平洋を挾んで相對峙する日米兩國の動きの中に世界幾十億の人民の生死が賭けられてゐると云ふことに深く思ひを致し、吾々アメリカ研究者は一步々々を堅く踏まんことを肝に銘じなければならぬ。「歴史上に於ても新世界であるアメリカの探究」こそシーグフリードが喝破し、今日、吾々が亦その儘に受容れて以て訓言とすべきものなることを重ねて強調しなければならぬ。そして、徒らに山積される二東三文の見切品ではなくて、アメリカ風とは異つた、量より質の、當著の如き豊かなる貯へから品定めして徐々に出される上等品が今後益々公にされんことを切に希念しつゝ、紹介の筆を擱く次第である。(岩波書店發行 定價壹圓) (哲島晃)

西洋中世史新講

中川一男著

本書は各々獨立した七つの論文から成り立つてゐる。しかしそれは單なる個々の論文の集積に盡きるのではない、互に密接な聯繫を保ちつゝ、著者の所謂「中世文化の一面を開明してゐるのである。その一面とは中世文化の宗教的・神祕的・藝術的なる一面に對する科學的・人間の・論理的なる半面に外ならない。著者の目的はかゝる中世文化の現實主義的傾向が三つの基本的要素、即ちゲルマニア的要素・ローマ的要素・アラビア的要素の各々が相結合融合する事によつて徐々に形成され來り十二、三世紀に至つて大なる成長をとげた事、斯様な傾向は全くルネサンス的なるものと考へられる可く、したがつてアルプス以北、特にフランスに於てはこの時代既にルネサンスの準備は全く整つてゐたのであつてそれが充分なる展開は必ずしも伊太利の影響に俟つ要のなかつた事を論證せんとするにあると思はれる。しかして著者はかゝる文化の基盤を中世末の經濟社會——都市生活の發展に求められるのである。先づ第一に中世の經濟はゲルマン民族の武力支配の經濟面であるとしてそれが前提たるゲルマンの政治組織の發展を説いた「中世に於ける主權の發達」なる第一章が設けられてゐる。次の第二章「中世に於ける經濟社會の發達」フランスに於ける中世都市の成立」「中世に於ける都市生活の表現形態」の三論文は中世文化の基盤としての都市の生活を解明せんとするものである。以上はどちらか云へば解説的なもので本書に於ては重點はむしろ次の最後の三篇に存する様に思はれる。「ゴテイクに於けるルネサンス的なるもの」「ゴテイクに於ける論理的なるもの」は共に都

市生活に基礎を置いた、中世文化の本質的表現たるゴテイク藝術の中にルネサンス的なるものが存在する事を明かにせられる。

それは市民的な「人間より神への傾向」と名付けられる可き中世末期の新しい變化なのである。最後の論文「中世思想のルネサンス的傾向について」は本書の總論とも云ふ可く二百頁に近い長論文である。こゝに於てはフランス十二・三世紀に於ける古代復興の意味を詳論される。全般を通じて著者の立場がフランス的であり、餘りに論理的に過ぎ、新しいドイツ中世史研究の優れた成果の採用が必ずしも充分でない點が遺憾であるが、それは研究の對象をフランスに求められたが故の止むを得ぬ事であらうか。七篇の研究は見事に結合され著者の目的は完全に達成されてゐるのである。

中世の再認識は現代の要求する所である。その點でもこの著作は特に歓迎せらる可き理由を有する。たゞ著者の立場は近世史の見地であつてこの點必ずしも medievalist を満足せしめるものとは云へぬであらうが、だからと云つてこの書の意義が減ずる譯のものではあるまい。八百頁の大著をものされた著者に深き敬意を表する次第である。(開成館發行 A5版八〇〇頁 定價七圓) (會田雄次)。

フランス現代史

西海 太郎著

現代フランスの課題は恐らくドイツの指導下に、ヨーロッパ新